

一九七七年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)337714649

FAX(03)329915367

振替 東京0158431 労金 東京労金本店No1154163

購読料 月額500円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

社会党委員長選挙が示したもの 2

社会党委員長選挙の舞台裏 3

資料1 久保・村山両氏の話し合いの基本 6

資料2 要請(岩垂寿喜男) 6

資料3 共同(村山・久保) コメント 7

◇国労北海道闘争団交流合宿の報告◇

「もっと交流、もっと団結、もっと闘いを」 7

中長期の展望と方針、目標設定 10

労働者の力に自信持てない指導部 11

——全通大会を傍聴して——

読者からのおたより 13

「保守二党制」、それとも「大政翼賛会」 15

——総選挙後の政治動向——

編集部からのおたより 18

旬刊 社会通信

NO. 551

一九九三年一〇月一日

一九九三年一〇月一日発行

(毎月一日・十一日・二十三日発行)

■巻頭言■

社会党委員長選挙が示したもの

投票率六六・五二%、三人に一人が投票しなかった社会党委員長選挙、村山六万五千、という一万八千で、「大差で村山勝利」との構図だが、事態はそれほど単純でないことを投票結果は示している。

第一、社会党員数は一三万人（党員には正規の党員と協力党員の二種類あり、正規の党員も日常の党活動に参加する党員と一部労組が名簿を管理する党員に区別される）、したがって村山氏は全党員の五〇%の支持しか得ていないということだ。

第二、投票結果も異常だ。四万三千人が棄権したばかりでなく、九万にもみたくない投票総数のなかで、白票二千、無効票三千二百が出ていることだ。その率はじつに六%にのぼる。

第三、投票行動も異常だ。もっとも低いのが鹿児島県の三八・四四%、ついで山口の五二・九六%だが、東京につぐ党員数を誇る北海道は五五・八〇%、票の出方も面白い。たとえば福岡だ。村山票が九一・八八%でいとう票はわずか八・一二%。私のみならずこれは、と思うのではないか。

第四、いとう票が村山票を上回ったのは千葉、広島だけだ。しかし内実は異なるようだ。東京と兵庫に例をとろう。東京では千七百対三千五百だが、村山票三千五百に労組集団入票千八百がふくまれるという。電機、全電通が中心でその投票率はほぼ百%に近かったといわれる。この傾向は兵庫でも同じ。千二百対三千だが、兵教組、全電通などの労組支部党員が約二千八百、ここでも九〇%ちかい投票率といわれる。

しばらく前まで社会党員数は四、五万人だった。それが十一万をこえるところまでふくらんだ。その中心は地道な党拡大運動の努力とそれをはるかに上回る一部労組による社会党ジャックともいえる集団入党であることが前回の委員長選挙、そして今回の選挙でも明らかだ。

村山氏は小選挙区並立制に消極的といわれる。ところが、久保氏との一本化調整のなかで、久保氏の主張をとり入れた。村山氏をおした人びとの考えはさまざまだ。たとえばある県で村山支持を訴えるアピールにはこうある。

「党はいま逆流にさらされていますが、存在理由が失われているのでは決してありません。党内の諸潮流がその違いをのりこえ、いまこそ憲法と戦後民主主義の精神を体現してきた党の旗の下に大同団結し、再生のために立ち上がるではありませんか。そのためにも『村山富市』に圧勝を与えてください」

村山氏は記者会見で並立制について「定数や二票制は、しっかりと与党間の合意を守っていただけ必要がある」、企業・団体献金についても「五年後に廃止するといった結論を出す努力が必要」と強調したという。小選挙区導入はこれまで自民党がやりたくともはたせなかったことだ。それがいともかんたんに、細川連立政権のなかでやられようとしている。しかも、これまで反対の中心勢力だった社会党の同意のもとに。

従来、小選挙区制導入論一本だった大商業ジャーナリズムにも今日の政治情勢のなかで小選挙区制を導入することへの危惧が述べられるようになった。

いとう正敏は「小選挙区制反対」で委員長選をたたかっていた。いとう支持票は一万八千、執行部批判とみられる無効票、白票は五千二百。約二万五千の党員が小選挙区制反対の意思表示した。棄権票にも批判はある。しかも事態の推移とともに村山票の動揺も必至。社会党はいよいよ正念場である。

社会党委員長選挙の舞台裏

社会党は今、危急存亡のとき。党員、支持者の心は千々に乱れ、敵陣営、識者も、社会党はどうしたの」と目を丸くする。委員長選挙投票結果が史上最低の率だったのもその反映だ。「月刊Asahi」十月号で、宮澤前総理大臣はこう述べる。

「私は社会党はこんなことをして大丈夫なのかと心配する。あなた方は支持してくれた人を、ここで捨てられるんですかという気持ちですが、私が言うのも変だが、ありますねえ。今度の選挙法の改正でも真剣な議論がなきゃおかしいと思っし、社会党が埋没し、滅亡してしまうという危惧の念は当然ですよ」

こんなとき、社会党の愚行はさらにつづいた。与党第一党が、河野自民党総裁ですら「国家主義的人物」という細川連立政権を動かす人物の眼前で、「超法規的措置」と称し、委員長選挙メ切り延期を立候補者がいたにもかかわらずおこなったことだ。どうなってるの、なんてとの声が悲鳴のように聞こえてくる。事実経過を簡潔に報告する。

だましうちと不明瞭な運営

九月三日からの委員長公選告示にともない、三人の候補者名が浮上した。岩垂寿喜男氏、村山富市氏、久保巨氏である（五十嵐広三、上田哲各氏の名もチラついた）。

九月四日、護憲派が開いた集会で立候補要請に対し、岩垂氏は「相談する時間が欲しい」と含みをもたせた。それ以降、護憲派は、岩垂氏擁立実現に全力をあげた。

一方六七日にかけ、「真の政治改革をすすめる会」（衆院）、「社会党の再生をめざす行動グループ」（参院）が、急速に村山氏擁立にむけ動き出した。この両グループは、護憲派といわれる議員と、「創る会」「社民フォーラム」「水曜会」等に籍をおく（おいていた）議員の、左右連合隊である。二〇数県の県本部の書記長グループとも連携をとっているとみられていた。ただ、このいわゆる村山派には、岩垂氏とも近い議員も含まれており、村山氏と岩垂氏の両方が立候補するというのは、まずありえない構造が早くもつくられていた。

事実、岩垂氏は「村山さんが出るなら私は出ない」と漏らし、擁立派をヤキモキさせた。九月七日夕方に、山花、村山、久保会談がもたれ、山花氏は自分の不出馬と、二人に党を託すことを要請した。この時のやりとりはファジーであるが、ほぼ久保委員長——村山書記長の線でまとまるのでは、と周辺にはうけとめられていた。

ところが、純粹右派一本の久保氏では、岩垂氏再浮上となる。事実、護憲派の活動家党員は、九月四日に七百人も集まって氣勢をあげただけに猛然と立候補を促していった。

呼応して、東京の前代議士四人組（高沢、上田、斉藤、常松）が岩垂擁立の署名運動を展開していた。この四氏中心の動きも不気味に映ったようだ。そこで、八日には「岩垂たつか！」という観測が電流のように伝わった。

同じく八日それまでは、「委員長は大臣でない」と村山出馬に難色を示していた自治労・後藤委員長が軟化した。後藤氏の承諾のもと「すすめる会」は夜になって村山に再度

出馬を要請。村山氏は「自分が出馬することで分裂をさけることができるのなら、あえて出馬する」と承諾することになった。

九日。八時半から、山花、村山、久保会談が持たれたが、村山、久保両氏とも譲らず。村山氏は記者団に「久保、岩垂対決となったら分裂する。だからワシは降りられない」と本音を語った。

一〇時から委員長選立候補受けがはじまった。村山・久保調整は二度にわたり物別れとなった。その間、岩垂氏は村山に「連立政権下で党の主体性を堅持する。並立制は党大会討議結果を尊重する」など申し入れた。村山氏は「検討し最大限の努力をする」と応えた。村山氏の誠実な人柄からして岩垂氏もこれを信じたのだろう、立候補の動きはしなかった。

こうした動きを横にらみしながら、議員会館の一室で、ひそかな会合がもたれていた。和田静夫副委員長、小森龍邦代議士、いとう正敏参議院議員、吉田（正雄）、上田、斉藤、常松の各前代議士が、並立制反対を明言する候補をたてるべしと協議したのである。岩垂氏が出ないとすれば、このような動きが出るのは自然である。

立候補受けの締め切り時間は刻々と迫る。時刻はもう四時近くになった。党本部二階の奥から、物別れとなった村山、久保両氏が出てきた。三宅坂にうわさがとんだ。「このままでは五時になっても立候補者がゼロ。異常事態だから役員選考委員会を設置してそこまかせろしかないだろう」というのだ。

岩垂陣営はこの話におどろいた。談合で村山さんが消されてもしたら大変だと思ったのだろう。秘書が立候補書類をもって議員会館をたび出し、選挙実施本部にむかった。時同じく、参議院議員会館から足早に本部にむかう一行がいた。協議していたグループが、いとう正敏氏を擁立し届けにむかったのだ。

異常事態の幕があく

報道陣で黒山の選対本部前。いよいよ異常事態のドラマがはじまった。四時四〇分。村山、久保両氏があらわれた。岩垂秘書も着いた。ここまでは予想の顔ぶれ。いとう氏の巨軀が汗を拭きふきあらわれた。選対役員ははじめ「何しにきたのか」といぶかしげにみた。そして、顔から血の気がひいた。

いとう氏は、二百余名の党員の党員署名簿とともに手続きをすませた。締め切り五分前である。同じく岩垂秘書が手続きをしようとした時、ガクゼンとすることが選対から伝えられた。「受けつけを明日まで延長する」というのである。秘書はあわてて電話にとびついた。そして、ひとまず受付をやめ、留保ということで書類を持ち帰った。

あらかじめ延期を知っていた村山、久保陣営はとって返し、直ちにまた談合に入った。いとう陣営や報道の質問に応え、選対本部はただ「諸般の事情による」「超法規約措置」を繰り返すのみ。九日夜から一〇日未明、「談合」は続いた。一〇日午前二時から一時間 にわたり山花氏は久保氏を電話で説得したという。どういう条件かは一〇余時間後に明らかになる。久保氏・村山陣営とも、いとう氏が出、岩垂氏が保留という状況に神経をとがらせた。表向きは、久保陣営は村山氏との対立選挙の姿勢を崩さなかったが、久保・岩垂

対決では予断を許さぬとの判断から、急速に村山一本化にむかった。

一〇日、一二時。首相官廷で、村山富市氏と新生党代表幹事代行渡部恒三、新生党奥田敬和氏らと細川首相が会談した。表向きは国会運営の相談と言うことだが、実態は細川という国家の長による村山「新委員長」の洗礼の場であった。村山氏は「連立政権に迷惑をかけるようなことはしない」と約束し、武村官房長官は「うまくいくように祈っています」とシバリをかけた。

一三時。最右派水曜会代表・本岡昭次氏と「すすめる会」世話人・野坂浩賢氏（社民フォーラム）が会った。本岡氏が野坂氏に示したB5小紙片には、「委員長公選にあたり、久保・村山両氏の話し合の基本」（以下「基本」）（資料1）とある。

書きかえられた村山公約

同じ頃、岩垂氏の所に、村山氏の選挙公約「私の決意」が示された。前日岩垂氏が付けた注文（資料2）は、不十分ながら取り入れられたように読めた。ただ、両派の「話し合の基本」は、その時は示されなかつたらしい。岩垂氏周辺が安堵していたころ、山花・村山・久保の最終調整が行われた。この会議を報道した各社のニュアンスはかなりちがう。ある社は、村山氏の「私の決意」を山花・久保両氏が村山氏の躊躇を押しきって書き直し、村山氏は「基本」への署名を渋ったが、山花氏が強引に押しきったと報じている。他の社は、村山氏は「何なりと意見を。いかようにも修正します」と「私の決意」を示して修正したとしている。いずれにせよ別記（次号参照）のように、「私の決意」は換骨奪胎され、岩垂氏の要求はすべて反古にされた（資料3）。その間わずが二〇数分。二〇数分でこれだけの重大な政治姿勢の転換が行われた前例は、私の知る限りない。

誠実で知られる村山氏が、これをどのような心境で行ったのかはわからない。ともかく村山氏は記者会見で「並立制の実現に努力するのは当然」と言いきった。もうひとつ関係者の注目を引いたのは、久保氏について「手腕、実力もあり処遇は考えなければならぬ」と述べたことだ。僅か二時間ほど前、村山支持の二五道府県本書記長の集まりでは、書記長は断じて久保には渡さぬとの氣勢があげられていたのである。

書記長グループにこの急転劇が知らされたのは、会議を終えて飲み会に移ってからであった。ある書記長は「これじゃ棄権が増えるな。国政選挙より低い投票率だとマスコミに叩かれる。弱った」と嘆いていたが、後の祭りであった。

岩垂氏周辺は、この報道に接したとき、「だまされた」とブ然たる表情であった。こうして、全ては終わった。

資料1 久保・村山両氏の話し合の基本（一九九三・九・十）

一、久保、村山両氏とも、今日の委員長公選に臨む共通の前提は、細川連立政権を守り、政治改革（小選挙区比例代表並立制による選挙制度改革を含む）の成功のため、全力を尽くすことではなければならない。

一、その達成のため、両氏とも、①前項の考えに同意しようとし、党内勢力に支援を求

めず、②また、組みすることはできない旨を明瞭に表明する。
一、この基本をもとに、山花委員長のイニシアチブによって両氏が話し合い、一定の方向が出た場合は、両氏を支援するグループはこれを尊重する。

資料2 要 請 (岩垂寿喜男、九三・九・九)

私が浅学菲才を顧みずに委員長選挙への立候補を考慮せざるをえなかったのは、山花委員長が有権者に対する公約と党内の民主主義を軽視して無原則に連立政権に参加したという「ボタンのかけちがい」をただしたいと考えたからであります。このあたりまえのことが日本社会党に通用しないとすれば、わが党は国民に対して民主主義政治を口にすることはできません。

私は、社会党が諸先輩のたどった苦難の途を大切にしながら、憲法を守り、社会党の不正をただす姿勢を堅持して欲しいという国民の期待を考えると、「一寸の虫にも五分の魂」の志と、「直而不阿」の教えを生かすこと以外に日本社会党を解党の危機から救うことはできないと思ひ悩んでまいりました。

幸いにして議会制民主主義の在り方や党の将来を憂うる有志議員のみなさんが村山富市氏に委員長立候補を働きかけることとなりました。

私はこれらの皆さんの愛党の熱情をしっかりと受けとめ、この際、村山富市氏に対して党内民主主義を大切にして、次の立場にたつて立候補されるよう要請いたします。

- ①あくまで護憲の党としての誇りを堅持する。
- ②連立政権への対応については、党の主体性と原則を明らかにし、毅然とした姿勢を貫く。
- ③小選挙区比例代表並立制については、党大会の討議とその結果を尊重する。
- ④政治改革については、企業・団体献金の廃止は勿論のこと、公的助成の在り方等についても国民の理解と納得が獲られるように改める。
- ⑤消費税については「廃止」をめざす党の方針と矛盾しない改革を一步一步前進させる。

以上についてしっかりとの方針を示し、国民の信頼と第一線で苦悩する党員の期待に応えるよう要請いたします。

資料3 細川政権を一丸となって支える

(共同〓村山・久保〓コメント、九三・九・十)

非自民の改革政権樹立は、山花執行部の共同作業であり、われわれが一体となって推進してきたものである。従って、本日までの話し合いは、この方針を貫くためにいかなる新体制を築くかにあった。

われわれは本日、山花委員長が示された、党が一致して非自民の改革連立政権擁護と腐

敗をなくす政治改革の実現をめざす新体制を築き上げるため、手を携え一体となって邁進することを確認することができた。

実りある話し合いのために貴重な時間を与えていただいた選挙管理委員会の皆様と理解を示していただいた党员、関係者各位に心から感謝を申し上げます。

我々の任務は、細川政権を全党一丸となつて支え、党が代表として閣内に送り出した山花政治改革担当相を中心とする閣僚を全面的に支援し、小選挙区並立制への選挙制度改革を含む政治改革を実現させるとともに、新しい制度のもとにおける党の再生を期することにある。

我々は、共同して全党員に支持を訴える。

◇国労北海道闘争団交流合宿の報告◇

自らの生活と闘いは自らが作る

「もつと交流、もつと団結、もつと闘いを」

闘いは新たな段階へ

国労闘争団の闘いも四年に入り、特に昨年五月二八日の『中労委解決案』提示以降、国鉄闘争も新たな局面に突入しました。

この間、国労闘争団は「敵よりも一日長く闘う」ために生活体制作りの事業体確立に重点を置かざるを得ず、目に見える大衆闘争の不足から「国労闘争団の姿が見えない」との声がよせられました。しかし、闘争団の闘争体制作りも確実に前進しており、今年四月の北海道と九州での闘争団合宿そして六月に開催された闘争団全国代表者会議では、闘争団自らが「全国に打って出る」ということを最大の課題として運動を強めていくことを確認しています。

このような闘争団の闘争体制確立の中で、五月一四日に横浜地裁において『横浜人活裁判』で完全勝利と前代未聞の上告断念、さらに五月二〇日の東京高裁における『新宿車掌区事件』の完全勝利の画期的判決を勝ち取りました。これは、JRに大きな打撃を与えたと思います。また、JR東日本会社の株式上場は『民営化の総仕上げ』ではなく『破綻の総仕上げ』として、あらたな矛盾を露呈し、そして不当労働行為を抱えたままの株上場が国労との労資紛争を社会的に拡めることとなり、株式上場反対闘争を反転攻撃として政府・JRを追い詰める闘いとなります。

そこで、国労闘争団および家族と国鉄闘争支援の仲間の皆さんで『交流と学習』を深め、国鉄闘争をさらに強め秋季年末闘争へ向けて『北海道交流合宿』を開催しました。

二百十人の熱気で熱さもふつとぶ

八月二八日〜三〇日、「もつと交流、もつと団結、もつと闘いを」をメインスローガンに、国労北海道本部主催（共催）——国鉄闘争支援共闘会議・闘争団北海道連絡会議）で音威子

府を会場に二一〇名(三日間を通じて中央共闘六五名・道内共闘二五名・闘争団員家族七〇名)が参加しました。

二八日、台風十一号が北海道に接近しあいにくの空模様の中、本州から道内から続々と仲間が会場に集まり、初日は二一〇名の参加者で雨を吹き飛ばす熱気につつまれ合宿の開催式は始まりました。井上北海道本部委員長が「分割民営化の矛盾はさらに拡大している。解雇撤回闘争は分割民営化に帰結せざるを得ない」と主催者挨拶。続いて、中里中央共闘会議議長は「デール基金一五億円達成し長期闘争に耐え得る体制を図るため中央共闘も頑張る」との激励と「九月を総学習、十月を総行動と位置付け秋季年末闘争を大衆闘争で敵を攻め上げるための意思統一の場としての合宿としよう」と挨拶。来賓の宇佐美音威府村長は「自治体も分割民営化の被害者であり、村としても市民の合意を得ながら出来る限りの支援を続けたい」と歓迎の挨拶を行いました。

合宿カリキュラムに入り、提言者の立山学氏(ジャーナリスト)が「分割民営化の矛盾が何一つ解決されないで、平成九年までに一定のケリをつける腹積もりの運輸省も一〇四七名の解雇問題は未解決の課題を言わざるを得ない状態に追い込まれている。この客観的情勢の中で正しい者が勝つためのケンカが必要、株上場でさらに矛盾を暴露しよう」との問題提起。続いて報告した三好宏一氏(札幌学院大学教授)は「分割民営化で平々凡々たる人間の良心と自由を踏みにじった。そして人間は思想と心がなくなったら人間でなくなることも示した」と述べた。また、飯田勉氏(国労東日本本部書記長)は「新宿車掌区事件と横浜人材活用裁判の経過と判決の意義」について報告し、国鉄闘争の勝利に向けての重要な助言を受けました。会場参加者発言で小野寺氏(東京地評)と稲村氏(京都地評)から共闘運動の現状報告を受けて一日目を終了しました。

子どもたちも力強くコブシふりあげ

二日目は、朝九時三〇分から昼食をはさんで五時間半にわたって、十分散会で「闘争団と共闘組織の取り組みや闘いへの思い、そして勝つために何をするか」と真剣な討議が行われました。分散会討論として、①国鉄闘争を風化させないため単なる物売りでなく国鉄闘争を訴えていくこと、②国鉄闘争を本格化させるため一株主運動などで世論を背景に敵を追い込むこと、③JR組合員と闘争団の一体化を強めるため内部交渉を行いスクラムを固めること、④家庭で組合員と家族の話し合いの時間を作る努力をすることなど、最終日の集約会議で報告されました。

分散会後は、日頃の労働運動での疲れをいやすため野外でスポーツ交流。綱引きとムカデ競走を分散会対抗で行い大きな歓声につつまれ盛り上がりました。

夕方より、中島公園での野外大交流会では音威子府闘争団の全組合員(裏方で魚貝類焼きで活躍)と家族を含めて二六〇名の参加で、中央共闘に結集する労働組合の激励挨拶や道内闘争団の紹介と決意表明など寒さをはねのけて行われ、最後に中里議長の団結ガンバローの音頭に子供達も力強くコブシを上げていました。

闘争団の成長にみんなビックリ

三日目の集約会議では分散会報告そして大倉電気争議団の小池氏と京都コンピュータ学院労組の吉田氏より闘争報告を受け、国鉄闘争と結合して「一日も早い解決」を勝ち取ることを確認しました。その後、国労本部宮坂中闘から「秋から年末に向けて情勢を切り開いていくことで確認している。一人ひとりが闘いの主人公となるのが勝利につながると思うし、我々が全国各地で運動を作り直す為に奮闘する」との闘争提起がされ、闘争団北海道連絡会議からも「支援共闘の仲間の助言から弱さを克服し事前の闘争体制作りをしている」ことの報告と具体的な支援体制として、①闘争団上京行動の協力と連携、②闘争専従拡大の物販及び連帯する会の協力、③闘争団との交流を通じての指導及び助言等、要請され全体で確認しました。

そして、現地準備委員会として一六〇名を超える仲間の食事作りを担当した地区家族会を代表して千葉真貴子会長は、初めての経験で本当に出来るだろうかという不安があったが、皆で一つひとつ話し合って会員への呼びかけ、買い出し、炊事、後片付けと家族は闘争団もJRも一体になって行った。参加者に喜こんで頂いて会員もやって良かったと思っただ。食事作りを通じて家族全員が交流合宿に参加したと思っています、との報告に、会場全体が感謝の気持ちも含めての拍手が鳴り止まず家族会の報告を受けて、参加者全員が闘争団の成長を確認した気持ちだったと思います。

三日間の感想として、三好先生から「皆さんの成長におどろくと共に私も頑張る」と心温まる激励と、中里議長の「アマチュア精神を忘れずに頑張ってほしい」との重要な助言を受けて、最後に片上委員長のまとめと団結ガンバローで全日程を終えました。

「敵がいやがる音の出る」闘いをめざす

『中労委解決案』以降、『長期』という言葉が先走りし『生活対策重視』の雰囲気の中で運動が停滞し闘争意識が低下し、結果的に闘争体制を弱めるという状況であっただけに、今回の『交流合宿』の成功に向けて取り組んできた道内十三闘争団は闘いへの自信となつたと思います。特に、開催地の音威子府闘争団は自治体でも未経験人数の受け入れて、多くの戸惑いと不安を持ちつつ準備委員会を組織し、会場・宿泊・食事・交流会等を総手作りで組合員と家族が行ったことで大きな成果を得ています。

この三日間を通じて得た結果、そして準備の為に討論を重ね仲間同士支えあつての取り組みは、この三年間の到達点であり闘争間の成長であることを全体で再確認したいと考えています。

あらためて、闘いの原点に立ち返り『自らの生活と闘いは自らが作る』という決意を固め、秋から年末にかけて「敵が嫌がる音の出る」闘いを仕組んでいきます。

国労が仕掛けた現情勢を主体的に闘い、より有利な情勢に動かしていくことで奮闘していきます。

(闘争団北海道連絡会議・鈴木)

中長期の展望と方針、目標設定

——幹部と組合員の間にもズレ——

真面目な方針だ（運動方針） 私鉄の、今年の運動方針は連合加盟の他の組合に比べると真面目な方針だ。

今回は良かった、素晴らしいことだ。これで職場を固めよう。しかし、具体的・明確な運動の進め方が少し弱い感じ。政策闘争だが、今度は補助金もなくなりそうだ。

JRの分裂、鉄道ワンマン化。その中で、全体的に合理化迎合の気配もある。その結果組織は減少、対応策として組織拡大が問題となっている。

しかし、今の運動の状態ではなかなか難しいし、産別調整も難しい。中長期の展望と、それに対応した方針・目的設定が必要ではないか？

仲間は怒っている（選挙） それぞれの地域では、衆議院選挙に没頭している。年配の人達の、社会党への期待は強く大きい。だが、九三宣言・都議選・山花発言・都議選後の方針修正などの一連の動きに職場の不満が集中、選挙運動にならない状況だ。

「何が、ニューウエーブだ。ふざけるな」と、職場の仲間は怒っている。台所を扱う奥さんたちは「社会党の政策は一貫性がない、あれでは駄目だ」「あんな腐った奴等に、政権は渡すべきでない」とも言う。

再び這い上がるだろう（社会党） 自民は、農民票を放棄。栗田を都市に転換している。社会党の支持者は逃げる一方。その縮図が東京都議選だ。

落ちるだけ落ちれば、再び這い上がるだろう。民衆の要求に気がついて、本当の社会党とつながっている。

ファシズムの排除（連合との関連） 運動上の問題が多過ぎる。活動家の目は冷めている。総合的に見ている。連合は分裂の危機、私鉄も危機感をもっている。「山岸や山花はいない方がよい」と言う。

党と議員と労働組合の関係がぎくしゃくし、一線画して運動している。選挙で連合は、護憲派を推さないが、私鉄は「選別」差別は排除した。

地方を含めて、連合のファシズム的排除の壁は厚いが中央（連合・社会党）の横暴には、毅然とものを言おう。偉い人達は、実感がなく、連合に迎合。組織上の、自分の地位ばかり気にしているは駄目だ。

若い指導者が（教育活動） 教育が必要だと思いが、講師が皆年寄り過ぎる。労働学校も、ほとんど同じ先生ばかりだ。若い指導者が欲しい。

運動は転換の節目（民主化） 幹部と組合員の間を意識の「ズレ」がある。民主的に変えねばと思っている。

職場の運動は転換の節目。宣伝が先か？運動が先か？組織・宣伝・財政を中心に改革したい。イギリスでは水平討議で、垂直討議はない。

労働者の力に自信持てない指導部

——全通大会を傍聴して——

1、提案のねらいと状況の変化

新たな政治方針を決定し、組織機構も変更することより、三〇年総括から政策制度へと転換してきた一連の路線問題に決着をつけ、綱領の変更を含めた全通の新たな出発となる大会が本部提案の主旨であったと思う。

この大きな流れはつらぬかれ、議論をたたかわして全体をまとめようなどという姿勢はすでない。違う考えの者は違う様にやってもらってかまわないし、割って出ていってもらってかまわないという姿勢がより強まっているのではないだろうか？

しかし、その流れを中心としながらも、行革審答申の「分割・民営化」の浮上・進展と「時短」を中心とする労働条件問題の扱い、さらに予測をこえて急展開した解散・総選挙と政界再編という実態は、いよいよそれぞれの考え、態度の明確化を迫られたが故に、提案内容の論理矛盾みだいなものも少しではあるが明かになりつつあるのではないかとできれば、もっと突っ込んで明らかにした方が良いのだろう。

2、大会議論の論点と結論

本部からは「総選挙勝利に向けた決起大会として政治方針を含め重要部分は先送りなのだから議案に反対などという意見は極力さけるように」との根回しや、しばらくも前段にあったようだが、トップをきった地元釧路地区の「本部提案に反対」等の意見を皮切りに、いやおうなく賛否の議論展開となった。

その中心は、第一に「新たな政治方針」をめぐることであり、これは具体的政策の議論は先送りとの提案であったが、反安保・反基地・反自衛隊・反原発が出された他に、憲法擁護の立場からの総論に対する反論と、冷戦終了後という国際情勢を含む見方に対する問題の指摘もされた。これらに対する賛成意見は、社会主義体制の崩壊＝マルクス・レーニン主義だけではなく「イデオロギーの終焉」という考えと、「とにかく回りは変化し動いているのだから、その変化に乗り遅れず対応していかなければならない」「その為には旧来の発想を捨てる」ということ、さらに「労働者対使用者という見方の出発では、今の状況をとらえられないので労働者という立場ではなく、生活者・消費者という見方でなければならぬ」（これはもはやイデオロギーであり、一つの思想を述べているにすぎない）などなどである。

反基地・反原発や自由化反対など、具体的な体験と闘いからの発言はさすがに説得力があるものだったが、そのことにふれずに、とにかく今の流れという総枠からの賛成意見とは、いま一つ論点が噛み合わない。一方では「ソ連の崩壊を見ろよ」とひとくりにいわれているみたいでもある。

第二には、組織財政・機構の見直しについてである。単一組織として維持すべきという基本的な問題からの原案反対意見は少なかった。支部運動・青年部・女性部の運動上からの必要性など、各項討論でも議論になった。特に女性部問題を各級執行機関への女性組合員の配置をといて考えとがぶつかりあった。男女共生社会は、まず、同じ土俵、同じテーブルにすることが前提だというのが、本部と主流派の考えである。それぞれの違い、特殊性を前提として運動上から必要という観点はみごと消去されていく。総括討論では、まず金の問題というところに土俵が移されている。そのことを率直に発言した大阪は「地方

の少数地区は数の多い地区から金を上げているのだぞ」とまで、文字どおり言い放った。他は「情勢の変化に即応した組織形態を」ということを言っていた。つまり、運動が変わり、交渉中心となったということである。

問題は、運動による力ではなく個々の交渉能力ということになっていく。賃金奴隷たる労働者はどのようにして、使用者・資本家・管理者・当局の横暴から身を守ればいいのか。いや、今は横暴などはない。共通認識に立ち、分割・民営化に対しても共にスクラムを組むパートナーなのであり、対立ということより共通の土台を大切にしていかなければならない……云々。

しかし、基本的な問題として、対郵政省、国家権力に対峙するという客観的な条件に規定されて、単一組織として運動と考え方を一致させ、その為の組織的保障として中央委員会、中央執行部そして財政一元化があったのだが、この枠組みはすでに地本連合体と地本ごとの組合費決定・予算となることによって、組合員自ら労働者の側から対峙する姿勢を変え、つまり分割を前提にし始めていくことなのだろう。

第三には、やはり、どんなに難しいことを並べるより職場の実態である。時短の実施に伴う労働条件の悪化については、ほぼ共通して言われた。今回の時短はやはり合理化とは言わないまでも、労働条件が悪化したことはまぎれもない事実だったのだ。ここにこそ組合の立脚点がある。

「特に仮眠時間の問題は緊急課題である。」と東京中部からは強い発言があった。さすがに、これを否定する意見はなく、大阪も総括は納得しがたいとの発言もあった。

大会前の全通新聞で、書記長がもっとも本音を述べているので、このことも質問が出された。たしかに、分割・民営化を前にして労働条件などとは言ってられない。しかし、より積極的に事業の企業性の中で発展を考えるなら、もっと合理化を進めなければ企業として生き残れないということである。このことを労働組合幹部をして真剣に考えさせるほどに、今日の資本主義は爛熟している。

3、背景と課題

「何でこのようになるのか」ということを考えると、労働組合の力（闘いによる力）に自信がなくなっていることである。

独占資本と対峙した時に、中産階級が資本主義に巻き込まれる中で、労働組合は孤立感を味わい、労働者の闘いに自信が持てないとなれば、すり寄るしか手はないと感じているのである。このことが、労働者よりも生活者というイデオロギーが強調して出されている。階級対立は何の変化もないことを意識的に隠蔽しようとしているのである。

危惧されるのは、水と油ほどに、全通内部の議論に差がでていることである。こうした分断を利用して、民営・分割化攻撃が進行していくのではないかとということである。

課題は明かである。どんなに冷戦構造が終ろうとも、大会の討論でも鮮明になっていく。働く者の職場実態は、郵便職場の効率化時短によってもたらされた労働条件の大幅な切り下げ。集配職場では、慢性的な人員不足の実態である。この実態はおおい隠すことはできない。闘わずして労働条件の改善ができるというのは幻想である。ことは誰の目にも明かなことである。このことに我々自信が確信をもって闘うことであると思う。

◇ 読者からのおたより ◇

交流合宿、大成功 八月二八―三〇日に開催された北海道闘争団交流合宿は、大成功をおさめることができました。家族を含め現地実行委員会を結成し、準備を進めてきましたが、二百人を超える参加者とともに、秋―年末―年度末にむけ、大衆闘争で反撃することを意志統一することができました。さらにみなさまに連帯と共闘の拡大をお願いします。

(音威子府闘争団・S)

編集部より 九州「合宿」も大成功。勝つ条件は拡大しています。焦点はJR本隊での組織拡大です。

正確なコンパスが必要 社会党はわれわれをどこにつれていこうとしているのか、そんな思いがつのるばかりです。一日も早く正確なコンパスが必要です。

(大阪・K)

編集部より 委員長選挙が開始されました。いとう対村山。小選挙区制、社会党内民主主義のあり方が焦点です。いとうさんの出馬、そしてそれ以降の動きは「正確なコンパス」をすすめる努力になっていくと思います。

「社会通信」の充実を 党がなくなつて民主主義も人権もない。なんとしても働く者の党、社会党の再建と平和運動、労働運動の再建に、「社会通信」の充実を期待します。住所変わりました。

(奈良・I)

おかしいぞ、マスコミ 政治改革イコール選挙制度改革のマスコミ、小選挙区にイエスかノーかで改革派、守旧派の色分けがおかしいという声があるはずだが、目に見える形であらわれないもどかしさ。総保守化の進む今こそ革新リベラルは大同団結の時。労組も政党間代理戦争より組合員の気持ちを大切に、三鷹市・城野氏の勇氣ある発言に敬意。

(東京・I)

編集部より 第二次世界大戦後の枠組みが次々とこわされています。新たな枠組みが一索されねばなりません。頭をやわらかくしてがんばりましょうよ。

組合のなかに「管理者」と「労働者」 新鮮な情報、いつもありがとう。全通全国大会が地元で開かれ、全日傍聴しました。「組合のなかに管理者と労働者がいる」と、傍聴していた家族会のお母さんが言っていました。まさにその通りと思いました。本部には呆れ果てましたが、運動に見切りをつけられるような実態ではありません。微力ながら全通の再生に全力をつくす決意です。

(全通・み)

編集部より 「組合のなかに管理者と労働者」との指摘、私も同感。連合主流のJCはこの体制は六〇年代につくられました。全通組合員には力があります。今ならまだ間に合います。労働組合らしさをとりもどすために。

危機の社会党 社会党そのものの存在が危ぶまれているなか、貴誌の努力で、的確な指針と全国の仲間の活動を伝えてください。

(埼玉・N)

編集部より 社会党は自殺しようとしています。小選挙区制という青酸カリを飲むようにしているからです。私たちの任務はまず吐き出させること、それが社会党「再生」の第一

歩です。

社会党の自壊に不安と危機感 社会党が自壊していくという、何ともいえない不安感や危機感をもつのは、私一人でないと思う。新自由主義といわれる国家主義が中曽根いらい着々進められている。労働者のさまざまな権利意識、人間としての平等を求める当然の感覚、教育や福祉は公平に平等にという考えが根底から崩されようとしている。それが連立政権と政治改革に象徴されているのでしょね。私たちのガンバリがあるのみ。(兵庫・K)

「委員長選」に期待 もうこんな社会党はイヤ、と思いつつなかなか離れられません。護憲の先頭に立ってきたのは我々「社会党」です。なのに、自衛隊を容認し、安保を容認するような社会党は、我々の「社会党」ではありませんし、大衆に見離されて当然です。それにしても山花委員長、赤松書記長なんかありませんか。執行委員会や代議士会で決まったことが方針にされるなら大会など必要ありません。「委員長選」に期待。(神戸・N)

小選挙区制粉碎、企業献金廃止 山花執行部は早く総辞職せよ！ 今の執行部を支持する人はだれもない。党を早く再建し、平和と民主主義を守ろう。自民党の分派と池田大作的の私党に日本を渡すわけにはいかない。そのためには統一指導部を結成し、共に闘うことを願っている。小選挙区並立制粉碎、企業団体献金禁止。(北海道・N)

交流会でリフレッシュ 台風一過の酷暑のなか、音威子府(北海道)で開かれた国鉄闘争現地交流会に参加し、頭も身体もリフレッシュしてきました。労働者協同組合運動とDLR(デール)基金、そして闘争支援を通じた地域労働運動と国鉄闘争は労働運動の新しい財産をつくりあげつつあります。JR株上場、小選挙区制反対の上京行動の方針も決めました。(京都・M)

党「再生」の力 このまま社会党が解体するのか、職場の仲間も不安を抱えています。党の再生をやる力は職場、地域にある。(鹿児島・N)

「早急に闘いの指導部を」に共感 総選挙後、毎号よい論稿がのり、たいへん嬉しく思います。第五四八号「早急に闘いの指導部を」は、小生のこのところの想いを如実に示していたので共感しています。(N)

委員長選挙で勝利をつかむ 守りながら攻撃し勝利をつかむ。これが護憲派の闘い方だ。委員長選に勝利しよう。(神奈川・T)

社会党が心配 党がどうなるのか、本当に重要な局面です。「通信」の重要性もますます大きくなります。ともにがんばりたい。(横浜・O)

「保守二党制」それとも「大政翼賛会」

——総選挙後の政治動向——

歴史の皮肉——細川の殿様と近衛文麿

歴史が吠えている。自民党が分裂し、だれも予想しなかった細川の殿様が連立政権を組織した。細川は一九三〇年代、昭和研究会の期待の星として首相に就任し、大政翼賛会そして太平洋戦争へと軍部ファッショへの「さきがけ」をなした近衛文麿の孫だ。

ほぼ半世紀を経て、細川は政治改革権推進協議会（「民間政治臨調」、中心メンバーは亀井生産性本部長、後藤田前自民党副総理、鷲尾鉄鋼労連委員長。その周辺で下足番をやっているのが山岸連合会長、羽田新生党党主といった面々）に押され最高権力者の地位に就いた。

じいさんと孫、この二人をめぐる政治状況は驚くほど酷似している。細川の殿様が近衛のようなバカ様になることはないか、この危惧は思いの他深いようだ。「朝日」（八月五日付）で平松大分県知事はこう述べる。

「連立政権が政治改革の『大政翼賛会』となり、細川氏がおじいさんの近衛文麿元首相と同じ道を進むようなことにならないか。国民は期待ゆえに、そのことを心配している」平松のこの発言は的を射ている。というのは、民間政治臨調は自衛隊制服組にもっとも支持が厚く、自民党総裁河野洋平すら「国家主義的色彩の濃い政治運営を企図する勢力」という小沢一郎の後見人であるからだ。

細川への不安は日本史年表をくればさらに大きくなる。現代は日本近・現代史上、三回大激動期であるからだ。第一期は明治維新前後（黒船から西南の役までの一八五三〜七九年）、第二期は戦争とファシズムの暗い時代（満州事変から大日本帝国の崩壊、五五年体制成立までの一九三一〜五五年）、第三期は現在で一九八七年前後から始まる。争点は「憲法体制」だ。

民間政治臨調の会長で、日本財界の影のドンでもある亀井正夫は「朝日」（八月五日付）で細川にこう注文する。

「連立政権は日本にとって明治維新。敗戦時のマッカーサー統治に次ぐ『第三の平成の革命』ともいえる大きな変革だ。

戦後、片山内閣がやはり連立政権だったが、今回の連立政権はこれと違い、政権内の左翼勢力が弱い。それだけに安定感はある。

今度の内閣は暫定的なものとして改めて政界再編を促し、将来的には本格的な二大政党制になっていくのがのぞましい。その意味では転換期の内閣だ。」

憲法改悪を射程においた発言だ。そのプログラムは「憲法を考える——読売新聞『憲法問題調査会』レポート」（読売新聞社刊）、「日本国憲法改正草案」（現代書林刊）、「日本改造計画」（小沢一郎）らにみえる。

激動はさらに十年つづく。過去数年もそうだが、国際情勢もからみこれからもだらもが予想しなかった事件が続出することは必至。そのたびに切歯扼腕、悲憤慷慨、落ち込んでいては、歴史のダイナミズムから取り残される。歴史の流れを分析し、傾向をつかみ、労働者、労働組合員としての「歴史的使命」の実践が求められる。

民間政治臨調が保守二党の仕掛人

なぜ政治改革↓小選挙区制導入↓政界再編↓保守二党なのか。背景は五つだ。

第一。日本の経済力のお伽噺ような拡大だ。日本の世界に占める割合は十五%。日本の国際的地位は日本国憲法制定時と根本的に変化した。国際的政治構造も変わった。唯物史観のいう下部構造と上部構造が全面衝突する時代に入ったことだ。蟻から象に質的転化をあげた下部構造(経済力)は保守支配層にとり、上部構造(平和憲法体制)が障害となった。

第二。新たな帝国主義的の上部構造づくりが中曽根行革の反省のもと、新たに着手されたことだ。保守支配層にとって政治改革は「カネがかからない選挙体制」をつくることではない。海外権益推護のため自衛隊を手足とすること、そのため財政基盤を確立すること(消費税の税率アップ)、アメリカとともに国際政治を動かすことだ。日本国憲法改悪は、こうして彼らの最大の政治テーマとなる。

第三。労戦再編で総評が自壊したことだ。これで「平和と護憲の砦」、社会党の「左翼バネ」がなくなった。「日経連はパートナー」という連合に、財界は社会党解体、終戦処理の体制をたのむことが可能になった。それが日本生産性本部、社会経済国民会議をさらに拡大した民間政治臨調だ。

第四。行革の矛盾が自民党支持基盤を直撃、自民党の支持基盤が動揺から崩壊への加速化傾向が顕在化したことだ。「三点セット+α」がその象徴だったが、金丸・佐川スキヤンダルは、「羽田首班論」が社会党に与えたと同じダメージを自民党に与えることとなった。

第五。こうして民間政治臨調を参謀本部に保守の支配構造再編成が政界再編を名目に意図されたのだ。旧自民勢力を中心に野党をまきこむ。そして社会党の「護憲勢力」を小さなものにし、保守二党の体制をつくるというのである。

民間政治臨調の構成は日本生産性本部、社会経済国民会議(その中心勢力は日経連と連合)だが、新たな枠組みがもさくされた。自民、野党の若手議員に小選挙区制論者(その代表が後藤田正晴)をとりこんだこと、その他海部内閣時代、自民一党支配体制強化をもくろみクーデターの提出された小選挙区制並立制に反対した商業ジャーナリズム懐柔がおこなわれたことだ。テレビ、新聞の論説委員長クラスが動員され、政治改革↓選挙制度改悪への敷石とされた。大商業ジャーナリズムの変質の真の背景である。

「昔陸軍、今マスコミ」

こうして亀井のいう「平成の改革」となったのだ。しかし細川新政権誕生は野球にたとえればまだ三回の裏表を終了したばかり、社会党の無能ぶりが抗戦意欲を失わせているかにも見えるが、国民の意識は健全とはいえないまでも、覚めている。亀井がいうように「革命」ならば、国民が燃えていなければならぬはずだが、投票率は史上最低。「細川の殿様ガンバッテ」との声は、地元熊本だけの状況だ。これは連合が発足した時に酷似している。浮かれ舞い上がっているのは取材記者と旧野党幹部だけなのだから。

それにしても、商業ジャーナリズムはひどい。自民党機関紙「読売」は一千万部、中立を強調する「朝日」八百万部、総資本の立場を忠実に反映する「日経」、自衛隊必読紙「産経」、経営危機にあえぎ、今や「夕刊フジ」や「日刊ゲンダイ」なみの編集方針で生き残りをはかる「毎日」は三百万部台。活字離れの今日、テレビの影響は無視できぬ。〇〇大

学教授の肩書きでタレントも顔負けの活躍ぶり、政界再編論をブチまくる。

マスコミは今度の総選挙を「言い訳のウソつき解散」と報じたが、実際はマスコミの自作自演「マスコミ選挙」ではなかったか。

第一。マスコミはもともと黒い人物小沢一郎が指揮するグループを「改革派」のリーダーにまつり上げた。

第二。彼らみずからおこなった世論調査結果を無視し、政治改革を小選挙区制導入へと収れんさせた。

第三。こうしてマスコミは墓穴を掘った。「昔陸軍、今マスコミ」ではないが、かつての近衛新体制誘導へと手を貸しているのではないか。自民オチコボレ派、日本新党・さきがけに哲学はなく、分裂派、小沢グループには権力強化の哲学がある。将来の「勝者」は明確だ。

改憲勢力は四一〇議席十人にも

こうしたマスコミが報じないのは、「憲法体制」のゆくえだ。土井さんの議長就任、細川の戦争責任は一過性のものだ。おそらく大きな流れのなかではウタカタのように消えてしまふであろう。マスコミが強調する「非自民党」対「自民」の構図はとるにたらないことだ。選挙結果の特徴はなにか。

第一。社会党が羅針盤を失い、難破寸前の状況におちいったことだ。指導部がだらしないれば、乗組員の態度が問われる。首班指名で細川と書かなかつたのは岩垂寿喜男氏と岡崎ひろみ氏の二人だけ。この二人に勇気を得たのは私だけではないはずだ。

第二。総保守の肥大化だ。八月国会時の党派構成は自民二二七、新生六〇、日本新党・さきがけ五二、公明五二、民社一九、社会七六、共産一五、無所属一〇。

旧自民勢力（自民、新生、新党・さきがけ）じつに三三九議席、無所属を加えれば改憲議席（三四一）をこえる。憲法体制の非常事態といっても過言ではない。亀井や日経連をはじめとする幹部の発言、株式市場に一株の不安が見えないのはこのゆえであろう。

第三。改憲勢力は四一〇人にも達することだ。「五五年体制」では野党イコール護憲勢力、政権党イコール改憲勢力との構図だった。この図式はほぼくずれさつた。民社は今では自民以上の改憲政党だし、公明も小沢と結婚前。社会党議員の多くも「心は護憲」とはいうものの、身体をはって自己を主張するのは前述の二人だけ（目下のところ）とのありさまだからだ。

第四。こうして「五五年体制」がくずれたことだ。「五五年体制」イコール「自社体制」とのとらえ方が一般的だが、その本質は両党の党是に示される「護憲」対「改悪」にあった。今度の総選挙で旧自民勢力は三四〇超にもふくらみ、社会党は七〇にまでしぼんでしまった。この七〇が固まれば強い指導権が発揮できる。ところが現実はさきに述べたとおりだ。

「保守二党」は幻想

民間政治臨調が期待する「保守二党体制」のゆくえはどうなるか。「保守二党・グループ体制」の萌芽らしきものはみえる。細川政権は民間政治臨調を裏指導部とする八党派、三つの政治潮流となる。

一つは連合がにらみをきかせるグループで社会、民社、社民連、民主改革連合（旧連合

参議院)で九五、新生党・公明グループ一、二、新党・さきがけグループ五二との色分けだ。

プロ軍団は小沢グループ。細川内閣で官邸組(首相十官房長官)と閣僚(主要閣僚は小沢グループが独占)が「分裂」しているのは今後の政治の流れをみるうえで興味深い。日経連会長が本物の保守とやや進歩的(連合の同意を得られる)保守の二つが望ましいというのも、こうした連立政権内の動向を勘案してのことであろう。

他方、自民党にも三つの潮流がある。一つは反小沢グループで旧経世会のグループ。二つは海部、後藤田を後見人に小選挙区制導入で生き残りたい若手バッチ組、三つは自民の旧き良き時代を回顧する派閥領袖と中曾根に代表される老人グループだ。

今の時点でいえることは、新自由クラブを束ねられなかった河野新総裁に三百名を超える自民党を指揮、統率する能力はないことだ。社会党の解体同様、自民の漂流も必至。政局はさらに乱れるとの上に、これからの動きに備えることが重要だ。

小選挙区制導入で社会党は消滅

細川新首相は「政治改革(小選挙区制導入)ができなかったとき、政治責任をとる」と言明した。小選挙区制が導入されたとき、社会党の消滅は必至だ。「朝日」「共同」の調査によっても、七〇議席がさらに半減するといわれる。この調査はまだ甘い。というのは、総選挙結果にもとづき計算されているからだ。

小選挙区制が実際に導入されたとき、現在の「非自民」勢力は統一会派をつくることになる。現職七〇名の社会党議員は候補選定の「統一会派基準」のもと、候補に推されるだろう。しかし兵庫二区の土井氏をさきがけ、日本新党、新生党の支持者が支持するだろうか。あるいはまた岩手では「非自民」統一候補として小沢一郎の選挙を社会党員、労働組合員が手伝うことになる。まさに屈辱以外のなものでもない。

こうみてくれば自民と非自民に政策のちがいない以上、保守二党どころか大政翼賛会型挙国一致内閣にならざるをえまいと思うのは杞憂であろうか。

◆編集部だより◆

▽社会党はいよいよ正念場。一人ひとりの生き方が問われる。さて、あなたどうする。

▽編集子、二足のワラジどころか三足、四足のワラジをはいて大忙し。

▽社会通信読者会もできはじめた。多謝。一部でも多くふやしてください。